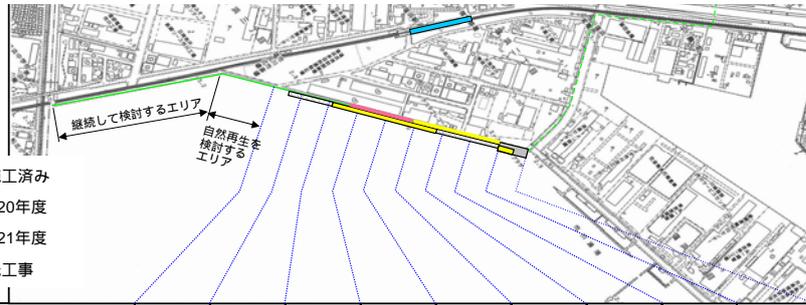


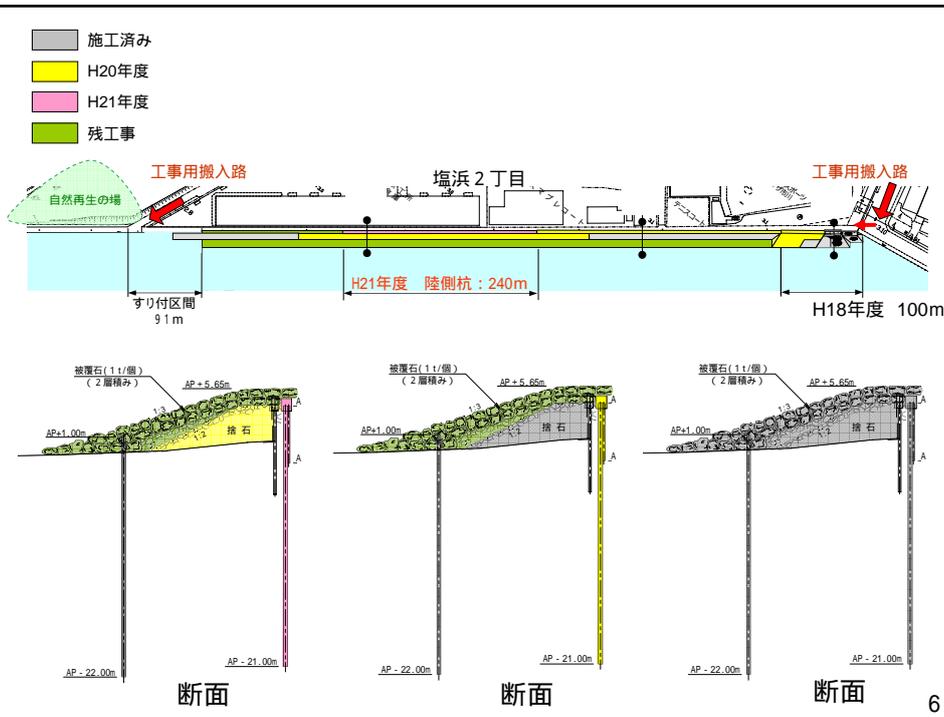
第1案（陸側のH鋼杭と鋼矢板の工事 陸側H鋼杭・鋼矢板 240m）



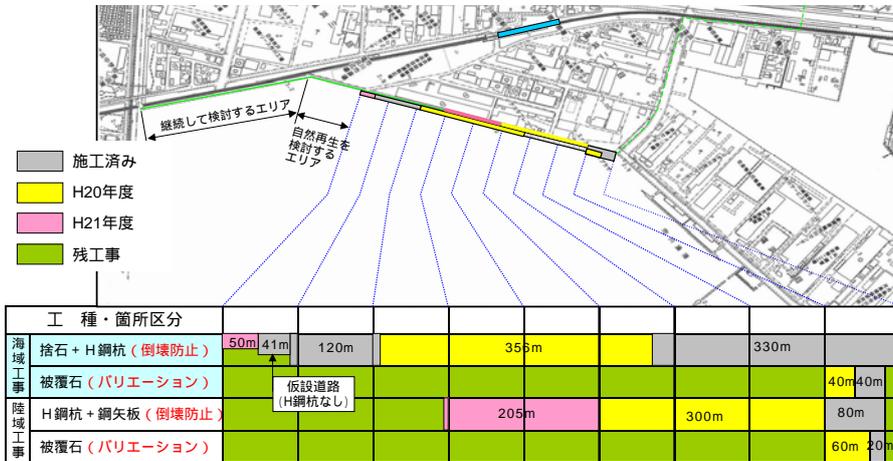
工種・箇所区分									
海域工事	捨石 + H鋼杭（倒壊防止）	41m	120m		355m				330m
陸域工事	被覆石（バリエーション）		仮設道路（H鋼杭なし）						40m 40m
陸域工事	H鋼杭 + 鋼矢板（倒壊防止）			240m		300m			80m
陸域工事	被覆石（バリエーション）								60m 20m

工事の特徴

陸側H鋼杭の施工により、耐震対策が進む。  
陸域工事のみなので通年施工が可能となる。  
未着手区間が残る。



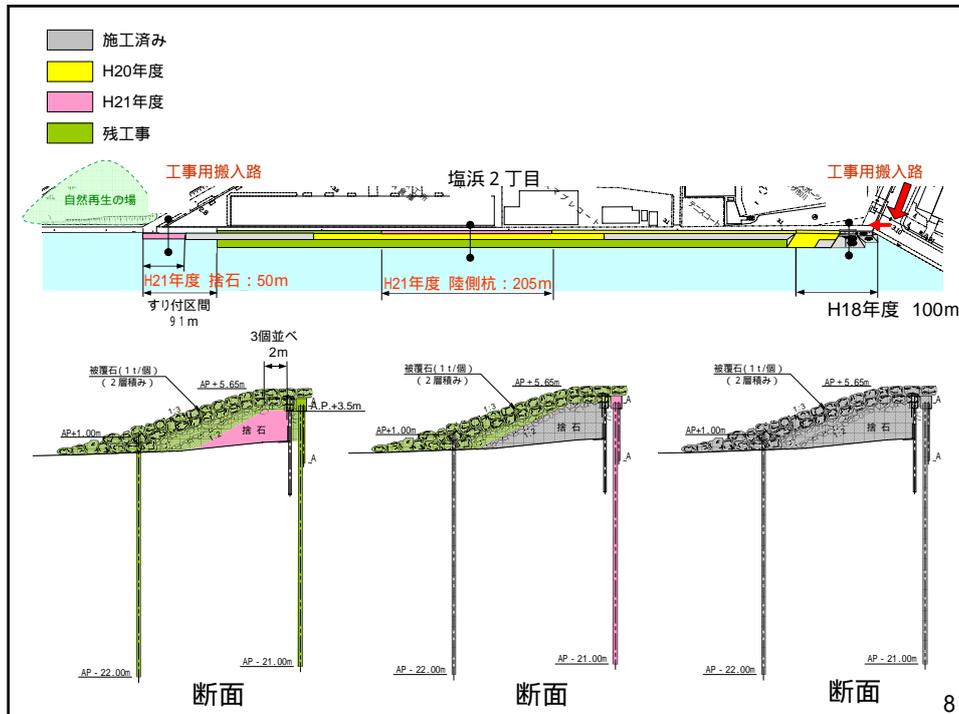
## 第2案（陸側のH鋼杭と鋼矢板の工事 + 未着手区間の捨石工事）



### 工事の特徴

陸側H鋼杭の施工により、耐震対策が進む。  
未着手区間の捨石を施工することにより900m区間での緊急的な倒壊防止が完了する。  
陸側H鋼杭と鋼矢板は陸域工事になるため通年施工が可能となる。捨石は海域工事となる。  
第1案に比べて、陸側H鋼杭の工事延長が短くなる。

7



8

**5. H21年度モニタリング調査項目(案)**  
**モニタリング調査項目**

赤字部分がH20年度からの変更内容である。

区分	項目	目的	方法	時期(間隔)	数量等
検証項目	地形	・護岸部の張り出しによる周辺への物理的影響の把握 ・洗掘等による周辺地形の変化の把握等	地形測量	春季：4月 秋季：9月の年2回 東側端部は年2回+イベント(台風等の高波)後	・護岸改修範囲の岸沖方向100m×(43測線) = 測線延長4,600m ・測線No. 82、L-2、対照測線L-3の岸沖方向500m×(3測線) = 測線延長1,500m ・石積護岸の東側端部脇の4地点
	底質	粒径の変化の把握	採泥・粒度試験	春季：4月 秋季：9月の年2回	・測線No. 82、L-2、No. 46、対照測線L-3の岸沖方向100mの4測線で10m間隔で採泥(10検体)：合計40検体 ・測線No. 82、L-2、対照測線L-3の岸沖方向500mの3測線では、沖合150m, 200m, 300m, 400m, 500mの5地点で採泥：合計15検体
	生物	潮間帯生物の定着状況調査は公開とし、ライトランセクト法による観察は市民との協働で行うものとする。	ライトランセクト法による観察  採取分析	春季：4月(H20) 夏季：8月下旬～9月の年2回 冬季は行わない。	・測線No. 82、H19年度乱積施工箇所、L-2、No. 46、L-3の5測線 ・石積護岸(斜面上)：方形枠(50cm×50cm)による連続目視観察 ・高潮帯から護岸のり先まで1m間隔 ・旧護岸法線より30～100mは10m間隔 ・石積護岸の東側端部の1地点においても観察 ・H19年度乱積施工箇所は潮間帯のみ観察  ・測線No. 82、H19年度乱積施工箇所、L-2、No. 46、L-3の5箇所における採取分析 ・1箇所当り高、中、低潮帯、のり先の4検体
	緑化	護岸構造を利用した基盤の形成方法を見出す。 石積護岸の立地環境に合う植物を確認する。 立地環境に合った緑化手法を見出す。	発芽及び移植の試験ヤードにおける種まき、植え込み後の観察	平成21年4月 ～平成22年3月	・発芽ヤードでは、発芽状況と種類、活着状況、他の植物の侵入状況、基盤の保持状況、天候を観察 ・移植ヤードでは、活着状況、他の植物の侵入状況、基盤の保持状況、天候を観察 ・観察頻度は4～9月は2週間に1回、10～3月は1ヶ月に1回
	置き砂	・砂を投入した場合の砂の挙動を把握する。 ・置き砂に現れる生物相を確認する。	地形測量  生物観察	年2回+イベント(台風等の高波)後  夏季：8月下旬～9月 春季：4月(H22)の年2回	・置き砂投入範囲の中で4地点  ・方形枠(50cm×50cm)による目視観察 ・潮間帯で1箇所
	水鳥	水鳥の場の利用への影響の有無を把握する。	専門家へのヒアリング	年1回	・専門家へのヒアリング1回
	波浪流況	行わない。			
	材料	青潮時の溶存酸素量測定。生物環境への外力把握を目的とする。	DO計による測定	青潮発生時	・第1工区の完成断面石積のり先。 ・護岸改修範囲の西側で1地点

